

明海大学不動産学部

不動産の不思議

第388回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

群馬県の伊香保温泉は、365段の階段沿いに建物が立ち並び石段街で知られる。上る途中の射的場や足湯、上った先の伊香保神社のほか、周辺には榛名富士や榛名湖など、心を癒やしてくれるスポットも多い。首都圏からのアクセスもよく、日帰り観光客も多い。

同温泉は、江戸時代には既に保養地として多くの文人墨客が訪れていた。明治時代には政財界人や外国人の避暑地としてにぎわい、「伊香保温泉」の名前が全国に知られた。



金子 夏望
不動産学部4年

伝統的な景観と共存する看板

06年の合併後は渋川市に属するが、合併前の伊香保町は景観計画および中心市街地地区景観ガイドラインを策定し、伝統的な建物がつくる街並みの維持向上とそれを資源とする観光客の誘致に努めてきた。

石段街の印象は、外壁を格子状の木材で覆った建物が並び古い街道で、縦の細い線が和の景観を演出している。これは初めからの景観ではなく、一般的なペンキ仕上げの外壁

ある。

第1は、色使いである。薄茶色ばかりの中、突然出合う群青色が強烈だ。

第2は、面の存在だ。

石段街もこの建物の2階も縦の細い線で「消え入るよう」に造られているが、看板は堂々と「面の存在感」をアピールする。

第3は、重厚感だ。看板はただの面ではなく、四方と中央に柱や梁は（り）を思わせる太い部材を使って前

新しい価値を生むきっかけに

に出し、看板自体が重厚な構造物に見える。

第4は、情報の伝え方だ。外国人観光客を想定したような字体、表記やメニューの見せ方が斬新だ。外国人観光客に情報を効果的に伝えることに加え、日本人観光客にも斬新な印象を与え、入店しようと思わせる効果もある。

「異質なものが混在」していることが理由だが、詳しくは次の通りで



群青色が目立つ外観

的なものや海外のものが入り込むと、景観や地域の価値を低下させるのではないかと思っていたが、今回の経験でそれらは共存でき、新しい価値を生むきっかけになると気付いた。異質な要素を加える「発展的な承継」を許容することが本来の意味の歴史を大切にすることにつながるのではないだろうか。

参考：渋川市ホームページ

【教員のコメント】

海外旅行では現地の食事が楽しみだが時々和食で体調を整える。現地景観や街並みに感動するがその中に母国のデザイン要素があると共感が生まれる。観光立国の中核を担う観光地では伝統の中にグローバルな連帯感を任組むことが求められる。